

# 小野篁と空也

珍皇寺には、生きながら地獄の冥官（めいかん）となったと伝える小野篁（たかむら）を祀る堂がある。小野篁（たかむら）と閻魔大王の像が二つ並んで祀られている。小野篁については、珍皇寺の像ほかに、千本通の閻魔（えんま）堂にも像がある。



千本えんま堂に祀られている小野篁の像

( <http://moon.ap.teacup.com/komichi/350.html> より)

どうです、小野篁の面構えは？ 不敵な面構えですね。彼によって閻魔大王に告げ口をされてはたまらんと、貴族たちが彼を恐れたと言われているが、さもあらんというような面構えである。しかし、小野篁は、不思議なことに、市井の聖者・空也と繋がっている。その点を、「千本えんま堂」をキーワードに少し探ってみよう。

「千本えんま堂」の公式ホームページと私お勧めのホームページを紹介するので、「千本えんま堂」という所がどんな所か、まずおおよその感じをつかんで欲しい。

<http://yenmado.blogspot.jp/>

<http://kyoto.wakasa.jp/detail/25/430/>

この「千本えんま堂」は、平安京三大葬送地のひとつ「蓮台野」（京の北）の入口に創建された。創建したのは小野篁だが、彼は、平安京三大葬送地とされる「鳥辺野」（京の東）と「化野（あだしの）（京の西）」にも[珍皇寺](#)と[福正寺](#)と大きく関わっている。

小野篁は、夜に珍皇寺の井戸から冥土に行き、閻魔大王と談判ののち、朝方に福正寺の井戸からこの世に帰ってきたと言われている。「千本えんま堂」には、そのよう井戸はないが、本尊が閻魔大王であるという点が大きな特徴になっている。

さらに「千本えんま堂」には、紫式部の供養塔とブロンズ像があるし、国の「重要無形民俗文化財」・「千本えんま堂六斎念仏」が演じられており、「千本えんま堂」は貴重な寺である。



高さ2.4メートルの柔んま様

### 「千本えんま堂」の本尊

( <http://kyoto.wakasa.jp/detail/25/430/> による)

どうです、この閻魔大王が「千本えんま堂」の御本尊なんですよ。御本尊！

境内に閻魔堂や十王堂があり、閻魔大王が祀られている寺は、珍皇寺のほかに、香川の志度寺、東京の源覚寺、千葉の龍正院 など結構あるが、閻魔大王が本尊として祀られている寺は、私の知る限り、「千本えんま堂」のほかに、鎌倉の円応寺しかない。大変珍しいのである。



紫式部の供養塔

( [http://kyoto-brand.com/read\\_column.php?cid=5449](http://kyoto-brand.com/read_column.php?cid=5449) による)



紫式部のブロンズ像

( [http://kyoto-brand.com/read\\_column.php?cid=5449](http://kyoto-brand.com/read_column.php?cid=5449) による)

なお、紫式部は地獄というキーワードで小野篁と深く繋がっている。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/murasiki.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/jigokuta.html>

さて、かつて私は、「えんま堂狂言」について少し書いたことがある。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/onotokuu.pdf>

しかし、その当時、知らなかったのだが、最近、近年「千本六齋会」という団体が「千本えんま堂六齋念仏」を演じているのを知った。「千本六齋会」というのは、京都西陣の西北部に伝わる郷土芸能「千本えんま堂六齋念仏」を継承する貴重な団体である。国から「重要無形民俗文化財」の指定を受けているようだ。そのホームページを紹介しよう。

<http://rokusai.jpn.org/>

そのホームページでは「六齋念仏」について次のように説明している。すなわち、

『「京都の六齋念仏」の起源は定かではありませんが、平安時代、空也上人が始めたと言われる踊躍念仏が起りこりと伝えられており、民衆に仏教を広めるため六齋日(毎月 8、14、15、23、29、30の六日)に市中各所で鉦や太鼓を打ちながら念仏を唱え踊ったことから六齋念仏と称されるようになったといわれています。その後、六齋念仏は変遷し、念仏踊を主とする念仏六齋系と、風流化し能や歌舞伎の演技などを取入れ娯楽性が進んだ芸能六齋系の二系統に分れて今日まで伝承されてきました。ただし、六齋念仏の芸能化が進み風流踊りや獅子舞・蜘蛛などの演目が入り出したのは江戸時代からとのこと。』

「京都の六齋念仏」は昭和58年に国から重要無形民俗文化財の指定を受け、現在、京都市内には二つの系統をあわせて十数グループの六齋念仏保存団体がそれぞれ特徴のある六齋念仏を継承しております。千本六齋会が伝承する六齋念仏は、芸能系六齋に属します。千本六齋会は、西陣という土地柄を反映して発展した華やかさが持ち味の六齋念仏を継承しており風流化の強い芸能系六齋です。』・・・と。

すなわち、「千本えんま堂六齋念仏」はかなり変形はしているけれど、空也上人の「おどり念仏」が起源のようなので、今年も年末に六波羅蜜寺で「千本えんま堂六齋念仏」の奉納があるようだ。

六波羅蜜寺は、珍皇寺のある俗に「六堂の辻」というところにある。「六道の辻あたり」は、「地のトポス」であり、私の著作「劇場国家につぼん」に紹介したが、より詳しくは私のホームページをご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/6doutuji.html>

そのホームページでは、珍皇寺や西福寺のことも紹介したが、六波羅蜜寺も紹介した。六波羅蜜寺については、次のように述べた。すなわち、

『天暦五年（951）、都は悪疫が流行って人々はばたばたと死んでいった。多くの遺骸が埋葬もされず路傍に放置されている京の町中を、空也上人は自らが刻んだ金色の十一面観音を車に載せて念仏を唱えながら歩き回り、生者にはひとりひとり仏前に供えた茶をふるまった。するとたちまち疫病は鎮まった。空也上人はおびただしい死者の供養のために西光寺を建て、悪疫をもたらず死霊の祟りを鎮めるために、十一面観音を本尊とし、梵天・帝釈天を納めた。空也上人没後五年、西光寺は六波羅蜜寺と名を改めた』・・・と。

すなわち、六波羅蜜寺は空也上人の創建なのである。その空也上人については、私の次のようなホームページがある。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kuuyasho.pdf>

そのホームページに書いたように、空也という偉大な巨人が誕生した場所「六道の辻」という所の場所性にご注目願いたい。

「六道の辻あたり」も「千本えんま堂」も京都の代表的な魔界である。

魔界とは、私の定義によれば、気味の悪い霊、怨霊、妖怪、鬼、天狗などの出没する場所又はそれらに出会うための場所や通路のことである。さらに、あの世など異界への出入り口も、広義の意味では魔界と言っても良いかもしれない。

魔界というものを理解する上で大事なものは、両頭切断して絶対的認識に立つ時、ひっくり返し現象が起こることである。その典型が怨霊の御霊へのひっくり返し現象である。魔界に神社や寺院が建てられ、大宮司や大和尚を始原として、多くの人の祈りが捧げられていくと、魔界は聖地になり得る。魔界というものは、ほとんどのところがそういう両義性を持っている。魔界でありかつ聖地であるし、魔界でもなく聖地でもない。同様

に、地獄も祈りによっては天国となる。空也の口称念仏はそのためのものである。

空也の口称念仏がどのようなリズムであったのか今となっては不明だが、「千本えんま堂六斎念仏」より立石寺の無形文化財「山寺夜行念仏」の方が原型に近いのではないかと思う。「山形夜行念仏」は、円仁が入唐、五台山で学び持ち帰ったもので、空也上人らによって山形県の村山地方で庶民信仰として発展したとされている。「山寺夜行念仏」がどんなリズムなのか、是非、聞いてみたいものだ。



山寺夜行念仏

( <http://bunka.nii.ac.jp/SearchDetail.do?heritageId=189472> より)

ともに、地獄とか閻魔をキーワードに、小野篁と空也が深い所で繋がっているようだ。